

IRMA BOOM : Interview video <2026 年 8 月 17 日 収録>



Q1. Book Activist の展示の見どころを教えてください。

A1.

この展覧会を通して「アクティビズム」とは、必ずしも何かを強く訴えたり、目立つように激しく行動したりすることだけではない、ということが伝わるといいなと思っています。

おだやかな人たちでも、アクティビズムというものは成し得る。そういう見方ができるのは、面白いことだと思います。そこに気づいてもらえたらうれしいです。

この展覧会全体が、可視化されたブック・アクティビズムでもあります。つまり、印刷された言葉には、それ自体に価値がある、ということを伝えようとしているんです。そして、そのことを意識するのはたいせつなことだと思います。

Q2. 展覧会であなた自身が気に入っていた点は？

A2.

会場構成を大きくふたつのパートに分けたことです。

まず、一つ目の空間には、模型を展示してあり、大きく本をめくる映像が流れていて、更にその横では、エルズワース・ケリーのプリント作品が展示されていました。そこから、廊下のような通路を隔てて、次の空間へと移動します。

通路の途中、壁面に『Book Activist』のプリントウォールがあつて、ここには、実際にミニブックをつくる際に印刷をしたシートが展示されています。ここを通り過ぎると、今度は完成した本が展示されている二つ目の空間にたどり着きます。

大きな展覧会を一気に見るという感じではなくて、構成が二つ、あるいは、三つ、映像も含めると四つのパートがあります。会場の中を進みながら少しずつ見ていくことで、いろいろなものを発見できる。その点がとても気に入っていました。



Q3. 展示空間に使われたピンク色が印象的でした。なぜピンクを選んだのですか？

A3.

まずは市松模様を選んだことが、大事なことだと思っています。

実は20年ほど前に、桂離宮を訪れたことがきっかけでした。桂離宮の庭にある建物の一つ松琴亭内部に、とても素晴らしい、たぶん襖というか、引き戸だったと思うのですが、市松模様が目につきました。それが青と白の市松模様だったんです。ただ、青は光を吸収する色でもあって、今回には、青だとちょっと強すぎるかなと思ったので、淡いピンクにしてみました。ピンクのほうが親しみやすい印象がありますし、一般的に「アクティビズム」が持つイメージとは、正反対のやさしい色ですよ。だからこそ、ピンクとの組み合わせでやってみるのも面白いんじゃないかと思ったんです。

Q4. 市松模様を導入することをいつ決めましたか？

A4.

市松模様のパターンは、引用やメッセージを会場に取り込むうえで、すごく効果的な方法でした。つまり、テキストに対して、です。市松模様は、一種のグリッドのような役割を果たすことができる。でも、それが最初からの意図だったわけではありません。ただ、結果的にそういうふうに機能してくれたのは、とても嬉しいことでした。いくつかのパートに分けることで、人にとっても読みやすくなるんですよ。



Q5. 展示台が何層ものラップで包まれているかのような演出にはどのような意図があったのでしょうか？また、どのようなメッセージがありますか？

A5.

私が良いと思っているのは、そこに展示されたのが完成した本ではなくて、未完成の模型だということなんです。つまり、完成した本とは、また違う体験になるわけです。本を入れたケースを含めて、会場全体は桂離宮のチェッカーボードを基に壁面もケースもデザイン・レイアウトされていたので、完成した本と未完成の模型の展示が、違う印象になったのは良かったです。

模型のケースは、本当はプレキシグラスで側面を塞ぎたかったのですが、結局それは叶いませんでした。そこで、アムステルダムにある EEN WERK という私のギャラリーでよく使うラップのような梱包材を使うことを思いつきました。展示するのはそもそも未完成の模型ばかりなので、未完成の素材が見えるのも良いかもしれないと考えました。例えば、オランダから日本に商品としての本を送るときにも、途中で積み重ねた箱が崩れないように、このプラスチックで包まれていたんです。ラップは、普段おもて舞台では見えない素材ですが、敢えて使うことで、本づくりの過程を伝える機能をしっかり果たしてくれたと思います。



Q6. 作品の展示方法を考える際に特に気をつけたことは何ですか？

A6.

来場者に直接作品を触っていただけなかったのは残念でしたが、それでもこの展示は典型的なギャラリーの展覧会よりも親しみやすく感じられたのではないかと思います。私が展示した本はもちろん私のお気に入りの本たちです。これまでに 550 冊の本を作ってきて、この展示はその中のハイライトでした。

展示の内容を考えるときたいせつにしたのは、多様性です。なぜなら、私にとってすべてのプロジェクトは新しく、それぞれまったく異なるからです。私の本はどれも個性的で、見た目も違います。展示ではそれがはっきりと伝えることがたいせつでした。

美術館で絵画に触れられないのと同じで、展示されている本に触れる必要はありません。触れられないのは残念ですが、本の良いところは一点ものの美術品と違って、買えることです。基本的に展示されている本は購入できます。だから本屋に行くかオンラインで本を探して触ってください。私が展示をするときは、いつも会場に本屋を設けて本を買えるようにしています。

Q7. レンガの壁に貼られたプリントは、どんなきっかけでミスプリントを展示することを思いついたのでしょうか。

A7.

私は本がどのように作られているかをみんなに見せたいから。だから印刷物を見せたかったのです。かなり大きな薄い紙 IBO ペーパーのシートに印刷されています。それを体験してほしかったのです。なぜなら、製本された後、手で薄い紙の感触を感じることはできませんが、壁に貼ったことで、人が横を歩いた空気の動きによって、紙がふわふわと揺れ動くのを目で見ることができました。その様子がとても美しく、私には魅力的でした。これが最初の理由。もちろんレンガの壁を覆うためでもありましたけど。

私たちは一つ目の空間からつぎの空間へのつなぎとなるなにかが欲しかったのです。また、シートの中には、正しいものもあれば、ミスプリントもあります。ミスプリントや色校正紙は、本づくりのプロセスで生まれる宝物です。それは、完璧でないものにも独自の美しさがあることを意識させてくれます。それが私の伝えたかったことの本質です。つまり、ときにはミスフィットであることが、もうひとつの美しさになり得るということです。

Q8. ケリーのプリント作品の背景や、それらを生み出す過程は特に魅力的でした。将来的にセルフパブリッシングを続けるつもりですか？

A8.

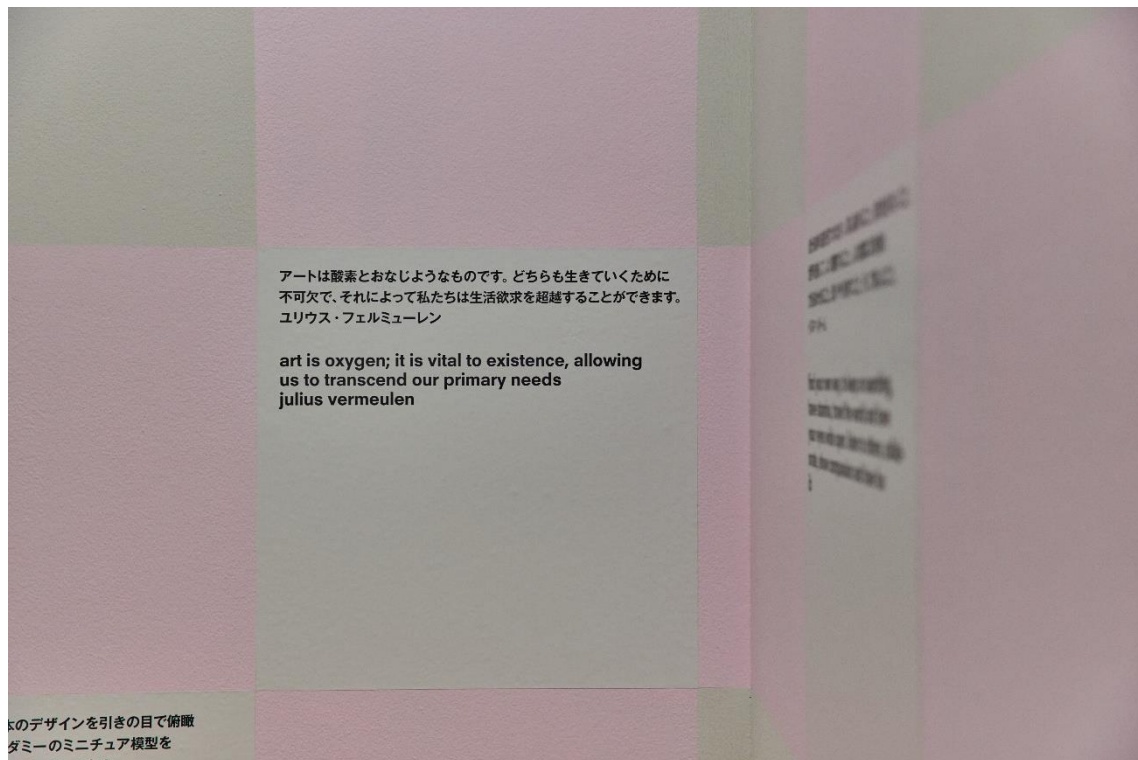
はい。ただ、私はほかの誰かから課題を与えられるコミッションの仕事が好きです。ときどき、自分主体のプロジェクトを考えることもありますが、ケリーの本は特別でした。エルズワース・ケリーは私が最も好きな国際的なアーティストで、私が所有する唯一のアート作品について、この本を作ることは私にとって必要不可欠でした。内容を構成しているカラフルで小さな作品は、私個人が所有するもので、その作品を基に本全体を作りました。エルズワース・ケリーへのオマージュです。



Q9.「ブック・アクティビスト」を通じて、日本、オランダ、そして日本のブックデザインやグラフィックデザインのアプローチの間に興味深い類似点や違いを発見しましたか？

A9.

もちろんです。私は自分を非常にコンセプチュアルなデザイナーだと思っているので、私の本はすべて異なります。私の本は必ずしも非常に正確であるべきとはかんがえていません、本を総体的に、情報の伝達者であり思考の容器として見ています。日本のデザインも同じですが、私たちは一つの世界に住み、同じ人間であり、違いを強調する必要はありません。ただし、究極の完璧さを追求しつづける点、その方法は、私が日本人から学べることだと思います。それがだれにとっても最も重要なことで、文化の違いはありますが、大きな違いはないと思います。



Q10.「ユリウスは『アートは酸素だ』という言葉を残しました。あなたにとって本とは何ですか？」

A10.

私が本を好きな理由は、それが民主的で多様なものであるからです。本は共有するためのものであり、私の人生そのものです。私は本なしでは生きられません。だから私にとって、本を作ることは存在するために不可欠な要素なのです。そしてもちろん、ユリウスは私の酸素のような存在でした。彼は私の最大の批評家であり、難しいプロジェクトにどう取り組むか、異なる視点で考える方法を共に考え、助けてくれました。芸術が彼にとっての酸素であったように、まさに私にとって彼は、酸素でした。彼が私と一緒にプロジェクトについて考え、取り組んだ方法は非常に重要で、私はそれをとても恋しく思っています。

Q11. 銀座で特に好きな場所や何度も訪れた場所がありますか？

A11.

私は日本が大好きです。文化も人も食べ物も大好きです。だから日本にいて、そして常に周りを気遣い、最善を尽くそうとする日本人の中にいることはとても素晴らしい体験です。それが私が10日間滞在した理由です。そして、ぜひまた戻ってきたいと思っています。私は日本も東京も日本人々も好きです。

Q12. 最後に、読者や展覧会の訪問者、そして日本のファンに何か伝えたいことはありますか？

A12.

私が望むのは、本を通じてアナログ本への愛を感じてほしいということです。本は私たちの知識と文化にとって不可欠です。誰も芸術家に「なぜまだ油絵を描いているのか？」と聞くことはありませんが、本を作ると「なぜまだ本を作っているのか？」と何度も聞かれます。本は、不可欠で、変わらないものです。本は変わらないので、手に取ることで過去の記憶と記録を得ることができます。ただし、興味深いのは、本は過去のために作るのではなく、現在と未来のために作っているということです。特定のテキストや声明、考えが印刷されることで、それが残るのです。もちろんインターネットは共有されるためのものですが、本もまた共有するために生まれました。インターネットがなかった時代、本はインターネットのようなものでした。すべては共有のためであり、それこそが、私が本作りを好きな理由です。本はほとんどオブジェクトのような存在になり得ます。本作りの初期には、本は作品として作られていました。私はすべての本を特別に作るので、すべての本が作品になります。だから人々が見なくても、アナログな本が私たちの文化、共有された文化であることを感じてほしいと思います。また、私が見せている模型は、単に本がそこにあるというだけではなく、それがどのように作られたかという『思想』であり『アイデア』なんです。だからこそ模型を見せることが重要だと思っていて、本の後ろには多くの思考が存在していることを感じてもらえればと。そうすれば本を見たときに、その背景にあるプロセスの全体像が見えてくるはずですよ。

来場者の皆さんには、こうしたことを体験してもらえたら嬉しいですね。そしてもちろん、展示を楽しんでいただくことも同じくらい大切です。本に対して私が抱いているものと同じ『愛』を感じていただき、それを皆さんと共有できればと思っています。

日本語訳：乙部恵磨



『ブック・アクティビスト』Irma Boom: Book Activist 展

会期 | 2026 年 6 月 5 日 (金) - 8 月 23 日 (日)

会場 | 無印良品 銀座 6F ATELIER MUJI GINZA Gallery1・2



イルマ・ボーム Irma Boom

グラフィックデザイナー。アムステルダムを拠点に活動し、主にブックデザインを手がける。1991 年にイルマ・ボーム・オフィス設立。

Photo by Anton Corbijn